

# ロンドンの十日間 '93

荒 牧 富 美 江

七月末、急に思い立って三年ぶりにロンドンに行き、ミュージカルを五つ観てきた。

八月のロンドンの劇場案内によれば「ミュージカル」上演中の主な劇場は十六もあり、そのうちアンドリュウ・ロイド・ウェーバーのものが五つあった。ロングラン十三年目の「キャッツ」、十年目の「スターライト・エクスプレス」、八年目の「オペラ座の怪人」と、新作もの上演の二つである。旅行者の多いゾーンとはいえ、ロングランものは今も満席の人氣である。新作のうち、とくに「サンセット大通り」は七月にオープンしたばかりで、残念ながら切符が手に入らなかったが、メロドラマ風な傾向に、スペクタクル要素が十分に加味されているのでロングランになるだろうとなかなかの評判であった。

さて、ロングランのものでまだ観ていなかった「スターライト・エクスプレス」と、「オ

ペラ座の怪人」をまず観ることにした。

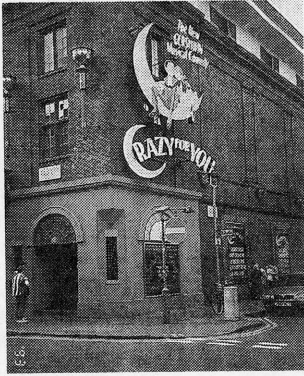
「スターライト・エクスプレス」は、世界中から集まった汽車たちの追いつ追われつの競走の物語である。あまり大きくないアポロ・ヴィクトリア劇場のエブロン・ステージあたりから客席まで、ジェットコースターのように交錯するいく筋かの通路を、国のマークをつけた、ローラー・スケートの青年達が縦横無尽に走り回るのである。日の丸の鉢巻をした青い目の新幹線も混じる。

ローラー・スケートの妻まじいスピードと轟音に、ロック調の音楽がかぶさり、客席を埋めた子ども達が歓声をあげる。……そして老残の蒸気機関車が自分の秘めた力に気づいて歌うバラードには、「キャッツ」の老雌猫の「メモリー」の哀愁がただよう。

プロデューサーのキャメロン・マッキントッシュがT・S・エリオットの詩集から「キャ

ッツ」を構想したとき、先輩のベテラン・プロデューサーは一笑に付したという。しかしマッキントッシュとロイド・ウェーバーは、子どものころ馴染んだエリオットの詩集の舞台化に執念を燃やした。そして「キャッツ」が成功すると、つぎに子ども達の大好きな機関車の競走を、これも子ども達の好きなローラー・スケートの競走に置き換えたのである。急な斜面、錯綜する狭い通路、スピードとスリルは満点だが、スケートをつけているのでダンス・ナンパードといったものもなく、ミュージカルとしてはいささか単調であった。それに、客席を縦横に走るコースを設けるのもそう容易ではなさそうで、このミュージカルを外国に輸出することは難しかったようだ。

つぎは「オペラ座の怪人」。原作はガストン・ルルーの小説なのでストーリーはよく知られている。パリのオペラ座の絢爛たる舞台と客席、怪奇な奈落にくりひろげられる恋と陰謀と流血のスペクタクルである。いささか前世紀的なおどろおどろしさに満ちた大芝居に、「キャッツ」や「スターライト・エクスプレス」の作者たちの意外な面を見たように思った。それにしても、シャンデリアが落下したり、種々のスペクタクルを仕組むには、



「クレイジー・フォー・ユー」  
プリンス・エドワード劇場

ハー・マジステイズ劇場の舞台は少し狭すぎるように思う。「女王陛下の劇場」の名の通り豪華な由緒ある劇場だが、二度も火災にあったり取り壊されたりして縮小し、現在の建物は百年ほど前のもので客席は一三〇〇位。イギリス最初のオペラ専門劇場という歴史からミュージカルの劇場となったようだが、音響効果からも余裕がなく「オペラ座の怪人」の前世紀的雰囲気には合わないように思った。三つ目は、ウェバーの作品ではないが、プリンス・オブ・ウェールズ劇場の「シティ・オブ・エンジェルズ」、ハリウッド・ミュージカルの看板を掲げている。

映画の脚本を書くためにハリウッドに来た小説家と辣腕プロデューサーを軸に、歌手、女優、ハードボイルド風の探偵やヤクザが絡

む。歌手の歌はあるがダンス・シーンはなくまずは歌物語といった趣である。ハリウッド・ミュージカルという看板はロンドンのお客さんには魅力があるのだろうか。

つぎは、プリンス・エドワード劇場の「クレージー・フォー・ユー」。アメリカ西部の田舎の劇場を取りしきる若い女性が、ショウビジネスに成功する話。ガッシュインのメロディと、タップダンスのあしらい方が気がきいていて、西部劇を見なれた目には懐かしい心温まる、後味のよいミュージカル・コメディだった。実はこの作品、ブロードウェイ一九三〇年作「ガール・クレージー」の改作で、一九九二年度トニー賞のベスト・ミュージカル賞を授賞したもの。「ブロードウェイが、英国からミュージカルを取り戻した……。」とアメリカ人を喜ばせた作品で、最近アメリカでは、旧作に新しい感覚を加えたこのようになりメークものが好評だという。

もう一つは、リリック劇場の「ファイブ・ガイズ・ネイムド・モウ (Five Guys Named Moe)」。モウ」という名の五人の黒人の歌手と司会者が、掛合い漫才ふうのやりとりをさみながら歌いかつ踊りまくる。ルイ・ジョーダンの賛歌である。前回に観た「ア・ス

ライス・オブ・サタデーナイト」は、リパールの若きビートルズを下敷きに当時のヒットソングを綴ったものだったが、小じんまりした地下劇場の舞台と客席の交流に、寄席ミュージカル? などと思ったが、「……モウ」にもそんな庶民的な雰囲気劇場に入るなり感じられた。

インタル近くになると、今度は歌手が客席に下りて歌い、果ては観客を従えて通路といわず、舞台といわず練り歩き踊る。お客も待ちかねたように次々に合流して客席はほとんどカラ。二階、三階にもいつの間にか上がったのか歌手がお客をリード、全館一体、乗り込んできた。いわゆるミュージカル・プレーとは違うもののようなが……。

以上、五つのミュージカルが今回の観劇のすべてだが、ロンドンの芝居行脚も今年で五回目、今回は急に思った気楽な旅とはいえず、終ってみると事前の情報不足が残念に思われる。シェイクスピア劇の公演も日程がわず、散策の道すがら覗いたナショナル・シアターはひっそりと静まりかえっていた。ロンドンの芝居見物は、ミュージカルだけではやはり悔が残る。(一九九三・九・三〇)